

目 錄

夏目漱石 著 鄒波 譯

我是貓

(首二章)

吾輩は猫である

日漢對照・精裝有聲版

一 / 002

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

一 / 003

在下是貓，名字嘛，暫且還沒有。

二 / 042

吾輩は新年来多少有名になったので、 猫ながらちょっと鼻が高く
感ぜらるるのはありがたい。

二 / 043

新年之後我有了點小名氣，作為貓，揚眉吐氣一回實在難得。

譯者後記 / 176

因難見趣：《我是貓》的一些翻譯難點



香港中和出版有限公司
www.hkopenpage.com

一

吾輩は猫である。名前はまだ無い。
 どこで生れたかとんと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめ
 じめした所でニヤニヤ泣いていた事だけは記憶している。
 吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもある
 とで聞くとそれは書生という人間中で一番獰惡な種族であ
 ったそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て
 食うという話である。しかしその当時は何という考もな
 かったから別段恐しいとも思わなかった。ただ彼の掌に
 載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感
 じがあつたばかりである。掌の上で少し落ちついて書生
 の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始であろう。
 この時妙なものだと思った感じが今でも残っている。第一
 毛をもって裝飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで薬
 缶だ。その後猫にもだいぶ逢ったがこんな片輪には一度も
 出会わした事がない。のみならず顔の真中があまりに突起
 している。そしてその穴の中から時々ふうふうと煙を吹

一

在下是貓，名字嘛，暫且還沒有。

要說在哪兒出生，我沒有絲毫的印象，只記得曾在幽暗潮濕的地方喵喵地哭過。就是在這裡，我第一次遇見了人這種東西。後來才聽說，書生¹是其中最為獰惡的種族。據說書生常常把我們捉去，煮了吃掉。那時候我一無所知，所以並不覺得特別害怕。只是被他托在掌上嗖地突然舉高時，感覺飄飄悠悠。當我在他手掌上定下心來，看見了書生的臉，那是我第一次見到人類。奇怪的感覺至今仍記憶猶新。首先，理應有毛來裝飾的人臉光溜溜的，像個燒水壺。後來我也遇見很多貓，從未見過這麼不完美的臉。而且，他的臉部中央過於隆起，洞裡面不時地噗噗地躡出煙霧，嗆得我受不了。最近我才弄明白，那是人類吸食的煙草。

1 明治、大正時期的用語，意為學生，特指寄宿在別人家，靠幫傭維持學業的學生。

く。どうも咽せぼくて實に弱った。これが人間の飲む煙草
といふものである事はようやくこの頃知った。

この書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐つておつたが、しばらくすると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が悪くなる。到底助からないと思つてはいるが、どさりと音がして眼から火が出た。それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。

ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさんおった兄弟が一匹も見えぬ。肝心の母親さえ姿を隠してしまった。その上今までの所とは違つて無暗に明るい。眼を明いていられぬくらいだ。はてな何でも容子がおかしいと、のそのそ這い出して見ると非常に痛い。吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つてどうしたらよかろうと考へてみた。別にこれという分別も出ない。しばらくして泣いたら書生がまた迎に来てくれるかと考え付いた。ニヤー、ニヤーと試みにやつて見たが誰も来ない。そのうち池の上をさらさらと風が渡つて日が暮れかかる。腹が非常に減つて来た。泣きたくても声が出ない。仕方がない、何でもよいから食物のある所まであるこうと決心をしてそろりそろりと池を左りに廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりに這つて行くとようやくの事で何となく

我在書生的手掌上舒舒服服地坐著，沒過多久便飛速旋轉起來，也不知道是書生在動，還是我在動，只覺得天旋地轉，噁心難受。剛尋思這下沒救了，啪的一聲，我眼冒金星。之前的事我還記得，後來發生了甚麼卻怎麼也記不起來了。

當我回過神來，書生已經消失不見。兄弟姐妹們一隻都見不著，連最最重要的媽媽也沒了蹤影。而且，現在我身處前所未有的明亮之處，亮得幾乎睜不開眼睛。咦，真奇怪。我慢慢爬出來，渾身疼痛。原來我被書生突然從稻草窩扔進了矮竹叢。

好不容易爬出竹叢，前面是一個大池塘。我坐在池塘前面，琢磨接下來咋辦，卻沒甚麼好主意。過了一會兒，我尋思著如果哭鼻子書生或許會來找我，試著喵喵地哭，可是不見人來。這時候風聲唰唰，吹過水面，天開始黑下來。我肚子很餓，想哭也哭不出聲。沒轍，只好先找個能填飽肚子的地方。拿定主意，我邁步慢騰騰地繞著池邊向左走，步履很艱難。忍著痛往前爬，總算到了有人味的地方。天無絕貓之路，我鑽過竹籬笆的破洞，來到一戶人家的院子裡。緣分真是奇妙，如果竹籬笆沒有破，我也許就餓死在路邊了，常言道，一樹之蔭，前世之緣，此言不虛。這個籬笆洞現在已經成為我拜訪鄰

人間臭い所へ出た。ここへ這入ったら、どうにかなると思つて竹垣の崩れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れていなかつたら、吾輩はついに路傍に餓死したかも知れんのである。一樹の蔭とはよく云つたものだ。この垣根の穴は今日に至るまで吾輩が隣家の三毛を訪問する時の通路になつてゐる。さて邸へは忍び込んだもののこれから先どうして善いか分らない。そのうちに暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降つて来るという始末でもう一刻の猶予が出来なくなつた。仕方がないからとにかく明るくて暖かそうな方へ方へとあるいて行く。今から考えるとその時はすでに家の内に這入つておつたのだ。ここで吾輩は彼の書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇したのである。第一に逢つたのがおさんである。これは前の書生より一層乱暴な方で吾輩を見るや否やいきなり首筋をつかんで表へ抛り出した。いやこれは駄目だと思ったから眼をねぶつて運を天に任せていた。しかしひもじいのと寒いのにはどうしても我慢が出来ん。吾輩は再びおさんの隙を見て台所へ這い上つた。すると間もなくまた投げ出された。吾輩は投げ出されては這い上り、這い上つては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶している。その時におさんと云う者はつくづくいやになつた。この間おさんの三馬を偷んでこのへんぼう返報をしてやってから、やつと胸の瘤が下りた。吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、この家の主人が騒々

家三色貓的必經之路。話說我進了這戶人家，不知接下來該怎麼辦。天已經黑了，飢腸轆轤，天寒地凍，眼看就要下雨，容不得半刻遲疑。走投無路之下，去暖和亮堂的地方再說。現在回想起來，那時候我已經鑽進人家裡了。在這裡我有機會遇見了書生以外的人類，碰到的第一個人是廚娘，她比之前的書生還要粗暴，一看見我就揪住脖子扔到門外。完了，我心想，兩眼一閉聽天由命算了。可是又冷又餓，怎麼也扛不住。我乘她不注意，爬進廚房。沒多久，我又被扔了出來。屢戰屢敗，屢敗屢戰，記得如此這般重複了四五次。那時候，廚娘也厭煩了。對了，前些時候我偷吃了她的秋刀魚，總算報了仇，大快我心。她正要把我丟出去的當兒，這家主人出來了。「吵吵鬧鬧的，怎麼回事啊？」廚娘提溜著我，說這隻流浪貓怎麼趕都要進廚房，不知咋辦。主人捻著鼻子下面的黑毛，打量了一下我的臉，說了一句「那就把它收下吧」，轉身進了裡屋。貌似主人平時話不多。廚娘不情願地把我扔進廚房。就這樣，我終於在這裡找到了容身之處。

なん
しい何だといいながら出て来た。下女は吾輩をぶら下げる
で き げ じょ わがはい さ
主人の方へ向けてこの宿なしの小猫がいくら出しても出し
しゅじん ほう む やど こねこ だ だ
ても御台所へ上つて来て困りますという。主人は鼻の下の
くろ け ひね わがはい かお なが
黒い毛を捻りながら吾輩の顔をしばらく眺めておったが、
やがてそんなら内へ置いてやれといったまま奥へ這入つて
しゅじん うち お おく はい
しまった。主人はあまり口を開かぬ人と見えた。下女は口
くわ わがはい だいどころ ほう だ わがはい
惜しそうに吾輩を台所へ抛り出した。かくして吾輩はつい
にこの家を自分の住家と極める事にしたのである。

吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合せる事がない。職業
きうし がこう かえ しゅうじつしょさい はい
は教師だそうだ。学校から帰ると終日書斎に這入つたぎ
りほとんど出て来る事がない。家のものは大変な勉強家だ
おも とうにん べんきょう か
と思っている。当人も勉強家であるかのごとく見せている。
じっさい きんべん か
しかし実際はうちのものがいうような勤勉家ではない。吾
輩は時々忍び足に彼の書斎を覗いて見るが、彼はよく昼寝
じっさい み ひるね
をしている事がある。時々読みかけてある本の上に涎をたら
こと ときどきよ ほん うえ よだれ
している。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帶びて彈力
かれ いじやく ひふ いろ たんこうしょく お だんりよく
のない不活潑な徵候をあらわしている。その癖に大飯を食
う。大飯を食つた後でタカジヤスターを飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ読むと眠くなる。涎を本の
おおめし く あと の の
うえ にさん よ ねむ よだれ ほん
上へ垂らす。これが彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は
ねこ ときどきかんが こと きょうし じつ らく
猫ながら時々考える事がある。教師というものは実に楽
にんげん うま きょうし かぎ ね
なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寝
つと ねこ で き こと
ていて勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はない。それでも主人に云わせると教師ほどつらいものはない。そうで彼は
しゅじん い きょうし かれ

我家主人很少和我照面。聽說他是教書的先生，從學校回來便成天待在書房裡，幾乎不出來。家裡人都覺得他勤勉好學，他也擺出一副讀書人的架勢。其實他並非家人所說的那樣用功，有時我躡手躡腳往書房裡窺視，見他常在午睡，口水流到讀了一半的書上。他的胃長期病弱，皮膚呈淺黃色，顯得沒有彈性，缺乏活力。奇怪的是他飯量很大。飽食之後喝助消化的澱粉酶²，然後展卷讀書，讀上兩三頁便犯睏，口水流到書本上——這就是他每晚重複的功課。我雖然是貓，有時也想，教師這職業真是輕鬆。如果投胎為人，最好是當教師。如此呼呼大睡也算工作，連貓都不難做到。可是主人說，沒有比做教師更辛苦的職業，每當朋友來訪，他總是怨聲連連。

2 高峰澱粉酶 (Taka-Diastase)，高峰讓吉發明的助消化劑，主要成份為澱粉酶。

ともだち　く　たび　なん　ふ　へい　な
友達が来る度に何とかかんとか不平を鳴らしている。

吾輩がこの家へ住み込んだ当時は、主人以外のものにははなはだ不人望であった。どこへ行っても跳ね付けられて相手してくれ手がなかった。いかに珍重されなかつたかは、今日に至るまで名前さえつけてくれないので分る。吾輩は仕方がないから、出来得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍にいる事をつとめた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝の上に乗る。彼が昼寝をするときは必ずその背中に乗る。これはあながち主人が好きという訳ではないが別に構い手がなかったからやむを得んのである。その後いろいろ経験の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天気のよい日は櫻側へ寝る事とした。しかし一番心持の好いのは夜に入つてこのうちの子供の寝床へもぐり込んでいつしょにねる事である。この子供というのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へ入つて一間に寝る。吾輩はいつでも彼等の間に己れを容るべき余地を見出しつつにか、こうにか割り込むのであるが、運悪く子供の一人が眼を醒ます。が最後大変な事になる。子供は——ことに小さい方が質がわるい——猫が来た猫が来たといつて夜中でも何でも大きな声で泣き出すのである。すると例の神經胃弱性の主人は必ず眼をさまして次の部屋から飛び出してくる。現にせんだってなどは物指で尻へたをひどく叩かれた。

吾輩は人間と同居して彼等を観察すればするほど、彼等は我儘なものだと断言せざるを得ないようになった。こと

剛住到這戶人家時，除了主人，我極不受人待見；不管去哪裡都遭冷遇，沒人理我。我現在還沒取名，可見我多麼不受重視。別無他法，我只好盡量多待在收容我的主人的身邊。早晨他讀報，必定坐在他的大腿上；他午睡時必定趴他背上。並非主人喜歡這樣，而是除他之外沒人搭理我。後來我有了經驗：早晨躺在飯桶上，晚上趴在被爐上，天氣好的時候睡在檐廊上。最舒服的還是到了晚上鑽進小傢伙的床鋪裡，小傢伙一個五歲，一個三歲，晚上在一間屋子裡共睡一床。我總是尋找空隙，見縫插針鑽進他們之間。運氣糟糕的時候，其中一人醒過來，那就糟糕了。兩個小傢伙——小的那個尤其壞——深更半夜也不顧忌，嚎著貓來了貓來了，放聲大哭。我那神經性胃病的主人一準被吵醒，從隔壁房間飛奔過來。事實上，前些時我的屁股剛挨過尺子。

和人類生活在同一屋檐下，觀察得越多，我越發堅信他們任性自私。我時常同衾共枕的小傢伙更是過分。隨心所欲的

わがはい ときどきどうきん こども いた ごんご どうだん
 に吾輩が時々同食する子供のごときには言語同断である。自分の勝手な時は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛り出したり、へつついの中へ押し込んだりする。しかも吾輩の方で少しでも手出しをしようものなら家内総がかりで追い廻して迫害を加える。この間もちょっと畳で爪を磨いだら細君が非常に怒ってそれから容易に座敷へ入れない。台所の板の間で人が顱えていても一向平気なものである。吾輩の尊敬する筋向の白君などは逢う度毎に人間ほど不人情なものはないと言っておらるる。白君は先日玉のような子猫を四匹産されたのである。ところがそこの家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持つて行って四匹ながら棄てて来たそうだ。白君は涙を流してその一部始終話をした上、どうしても我等猫族が親子の愛を完くして美しい家族的生活をするには人間と戦つてこれを掃滅せねばならぬといわれた。一々もっともの議論と思う。また隣りの三毛君などは人間が所有権という事を解していないといって大に憤慨している。元来我々同族間では目刺の頭でも鰯の臍でも一番先に見付けたものがこれを食う権利があるものとなっている。もし相手がこの規約を守らなければ腕力に訴えて善いくらいのものだ。しかるに彼等人間は毫もこの観念がないと見えて我等が見付けた御馳走は必ず彼等のために掠奪せらるるのである。彼等はその強力を頼んで正當に吾人が食い得べきものを奪つてすましている。白君は軍人の家におり三毛君は代言の主人を持って

時候把人家倒垂著提溜起來；往頭上套口袋；拋來拋去；或是塞進竈台裡。而我只要稍加反抗，全家人便追趕我大加迫害。前些時候我在榻榻米上磨磨爪子，太太就大發雷霆，從此不輕易放我進房間。就算我在廚房的木地板房間打顫也不理我。每當遇見斜對門家我所敬重的小白，她都抱怨沒有甚麼比人類更不懂人情。小白前些天剛生了四隻毛球般的小貓，出生後第三天，四隻小貓全被那家的書生扔到屋後的池邊去了。小白流著淚告訴我事情的原委，我等貓族必須為了天倫之樂、美滿的家庭生活而同人類戰鬥，剿滅他們，小白說。她說得極有道理。隔壁的三花貓也十分憤慨，人類並不明白何為所有權。原本在我們貓族，不管是小魚乾串兒的魚頭，還是鰯魚的魚扣，誰先發現就有權享用，其他的貓不遵守這個規則甚至可武力解決。可是那些人類絲毫沒有這等觀念，我們發現的美食總被他們強奪。他們靠強力搶去我們應得的食物，還毫不在意。小白住在軍人家，三花貓的主人是律師，而我住在教師家，相比之下我的生活更為樂觀，只需一天天湊合度日。人類再厲害，也不可能一直強盛下去，且耐心等待屬於貓的時代到來吧。

わがはい きょう し うち す こと かん
いる。吾輩は教師の家に住んでいるだけ、こんな事に関する
りょうくん らくとん ひ ひ
と両君よりもむしろ樂天である。ただその日その日がどう
うにかこうにか送られればよい。いくら人間だって、そう
いつまでも栄える事もあるまい。まあ気を永く猫の時節を
待つがよかろう。

わがま おも だ うがはい うち しゅじん わが
我儘で思い出したからちょっと吾輩の家の主人がこの我
まま しつぱい はなし がんらい しゅじん なん ひと
儘で失敗した話をしよう。元来この主人は何といって人に
すぐ で き こと なん て だ
勝れて出来る事もないが、何にでもよく手を出したがる。
はいく とうしょ しんたいし みょうじょう
俳句をやってほととぎすへ投書をしたり、新体詩を明星
だ まちが えいぶん とき
へ出したり、間違いだらけの英文をかいたり、時によると
ゆみ こ うたい なら な
弓に凝つたり、謡を習つたり、またあるときはヴァイオリン
な き どく こと
などをブーブー鳴らしたりするが、気の毒な事には、ど
れもこれも物になっておらん。その癖やり出すと胃弱の癖
もの くせ だ いじやく くせ
にいやに熱心だ。後架の中で謡をうたって、近所で後架先生
ねっしん こう か なか うたい きんじよ こう か せん
と渾名をつけられているにも関せず一向平気なもので、
せい あだ な かん いっこうへいき
やはりこれは平宗盛にて候を繰返している。みんなが
たいら むねもり そうろう くりかえ
そら宗盛だと吹き出すくらいである。この主人がどういう
かんがえ わがはい す こ ひとつき のち
考になったものか吾輩の住み込んでから一月ばかり後の
つき げつきゅう び おお つづ さき かえ
ある月の月給日に、大きな包みを提げてあわただしく帰つ
きて来た。何を買って来たのかと思うと水彩絵具と毛筆とワットマン
み かみ きょう うたい はいく え けつしん
という紙で今日から謡や俳句をやめて絵をかく決心
み はた よくじつ とうぶん あいだ まいにちまいにち
と見えた。果して翌日から当分の間というものは毎日毎日
じょさい ひる ね え
書斎で昼寝もしないで絵ばかりかいている。しかしそのか
あ み なに だれ かんてい
き上げたものを見ると何をかいたものやら誰にも鑑定がつ

既然想到任性自私，索性說說我家主人因為任性而吃的苦頭吧。我家主人原本就沒甚麼過人之處，卻又凡事好嘗鮮。你看他，寫俳句投稿《子規》³，新體詩投給《明星》⁴，寫些錯誤百出的英文，有時又練練弓箭、學學謠曲，還吱吱嘎嘎拉過小提琴，可惜的是，沒一件學成的。明明胃不好，學起東西來卻格外起勁。在茅廁裡唱過謠曲，被人起了個「茅廁先生」的綽號。他倒毫不在意，翻來覆去唱那句「吾乃平家宗盛是也」⁵，到後來大家一聽就想笑，「瞧，宗盛又來了。」我家主人也不知出於甚麼考慮，我住進來一個月之後，領當月薪水的那天，他提著一個大包匆匆忙忙回家，我正好奇呢，原來是水彩畫具、毛筆和「瓦特曼」畫紙。看起來他要放棄謠曲和俳句，開始畫畫了。果然，從第二天開始，他連著好幾天在書房裡畫畫，連午睡都不睡了。可是他畫的是甚麼，沒人能加以鑒定。大概他本人也覺得不怎麼樣，有一天，研究美學的朋友來訪，於是有了下面一番對話。

3 1897年創刊的雜誌，夏目漱石的友人正岡子規為雜誌的核心人物，雜誌致力於俳句的革新與普及，對於寫生文、小說的發展也有貢獻。《子規》與新體詩《明星》相對立，是日本明治詩壇的兩大流派。

4 與謝野寛於1900年創辦的雜誌，對和歌進行改革，推崇浪漫主義風格。

5 謠曲《熊野》中，平宗盛出場時的台詞。

かない。当人もあまり甘くないと思ったものか、ある日その友人で美学とかをやっている人が来た時に下のような話をしているのを聞いた。

「どうも甘くかけないものだね。人の見ると何でもないようだが自ら筆をとて見ると今更のようにむずかしく感ずる」これは主人の述懐である。なるほど詐りのない処だ。彼の友は金縁の眼鏡越に主人の顔を見ながら、「そう初めから上手にはかけないさ、第一室内の想像ばかりで画がかける訳のものではない。昔し以太利の大家アンドレア・デル・サルトが言った事がある。画をかくなら何でも自然その物を写せ。天に星辰あり。地に露華あり。飛ぶに禽あり。走るに獸あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然はこれ一幅の大活画なりと。どうだ君も画らしい画をかこうと思うならちと写生をしたら」

「へえアンドレア・デル・サルトがそんな事をいった事があるかい。ちっとも知らなかつた。なるほどこりやもつともだ。実にその通りだ」と主人は無暗に感心している。金縁の裏には嘲けるような笑が見えた。

その翌日吾輩は例のごとく櫻側に出て心持善く昼寝をしていたら、主人が例になく書斎から出て来て吾輩の後ろで何かしきりにやっている。ふと眼が覚めて何をしているかと一分ばかり細目に眼をあけて見ると、彼は余念もなくアンドレア・デル・サルトを極め込んでいる。吾輩はこの有様を見て覚えず失笑するのを禁じ得なかった。彼は彼の

「我總也畫不好，看別人的畫沒甚麼感覺，一旦自己握筆才真正覺得難呢。」這是我家主人的感歎，的確，此話倒是不假。他的朋友透過金邊眼鏡打量主人的臉，「剛開始誰都畫不好呀，別的且不說，在室內憑想像根本沒法畫畫。想當年，意大利大畫家安德烈·德爾·薩托說過，畫畫必先摹畫自然之物。天有星辰，地有露華，上有飛禽，下有走獸，池中游金魚，枯木棲寒鴉，自然即為一副活的畫卷。要想畫得像模像樣，你先練練寫生吧。」

「是嗎？薩托這麼說過？我頭一回聽說。說得好，是這個道理。」主人一個勁兒地贊同。這時，金邊眼鏡後面閃過一絲嘲笑。

第二天，我和往常一樣，躺在檐廊下舒舒服服地午睡。主人破例從書房出來，在我背後忙個不停。我已經醒了，眼睛睜了一分寬的細縫，看他到底在做甚麼。他正專注於安德烈·德爾·薩托呢。我見狀不禁失笑。朋友的調笑奏了效，他先拿我來練筆。我已睡足了，忍不住要伸懶腰。可是難得主人這麼專注地畫畫，我動身子就太對不住他了。我努力忍著，他

とも や ゆ けっか て はじ わがはい しやせい
 友に揶揄せられたる結果としてまず手初めに吾輩を写生しつつあるのである。吾輩はすでに十分寝た。欠伸がしたくてたまらない。しかしせっかく主人が熱心に筆を執っているのを動いては気の毒だと思って、じっと辛抱しておった。かれ いまわがはい りんかく あ かお いろ ど
 彼は今吾輩の輪廓をかき上げて顔のあたりを色彩っている。わがはい じ はく わがはい ねこ けつ じょうじょう で
 吾輩は自白する。吾輩は猫として決して上乗の出来ではない。背といい毛並といい顔の造作といいあえて他の猫にまさ けつ おも かお ぞうさく ほか ねこ
 勝るとは決して思っておらん。しかしくら不器量の吾輩でも、今吾輩の主人に描き出されつつあるような妙な姿とは、どうしても思われない。第一色が違う。吾輩は波斯産の猫のごとく黄を含める淡灰色に漆のごとき斑入りのひふ ゆう ふく たんはいしょく うるし ふい
 皮膚を有している。これだけは誰が見ても疑うべからざるじじつ おも いましゅじん さいしき み き
 事実と思う。しかるに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黒でもない、灰色でもなければ褐色でもない、さればとてこれらを交ぜた色でもない。ただ一種の色であるというよりほかに評し方のない色である。その上不思議な事はめ り ま いろ いっしゅ いろ
 眼がない。もっともこれは寝ているところを写生したのだから無理もないが眼らしい所さえ見えないから盲猫だか寝ている猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそかにいくらアンドレア・デル・サルトでもこれではしようがないおも ねっしん かんぶく え
 と思った。しかしその熱心には感服せざるを得ない。なるべくなら動かずにおってやりたいと思ったが、さっきからしょうべん もよ み うち きんにく もはやいっ
 小便が催うしている。身内の筋肉はむずむずする。最早一分も猶予が出来ぬ仕儀となったから、やむをえず失敬して

畫好了我的輪廓，正在給臉部上色。老實說，作為貓我長得並不出眾，背脊、毛色和臉蛋都不如其他貓兒出色，但是長得再怎麼寒磣，也絕不是他畫的那副奇怪模樣。別的先不說，顏色就不對，我的膚色像波斯貓，淺灰中帶著黃色，點綴著生漆色的斑紋。這一事實毋庸置疑。可是看主人塗的色彩，不黃不黑，非灰非褐，也不是以上顏色的混合色。這顏色只能說是一種顏色，無法做出其他評價。更不可思議的是沒有畫眼睛，不錯，我是在睡覺，這樣寫生倒也沒錯。可是連眼睛的存在都無法分辨，也不知道是瞎眼還是睡著。我暗想，再怎麼聽從安德烈·德爾·薩托，這樣子也全然不行啊。不過，熱情還是可嘉得很。我想一動不動配合主人，可是剛才尿意就很濃，感覺全身肌肉都在發癢。在這刻不容緩的當兒，只好先失禮了，我撐直兩條前腿，低低地伸長脖子，打了個大大的哈欠。

りょうあし まえ ぞんぶん くび ひく お だ だい
両足を前へ存分のして、首を低く押し出してあーあと大な
あくび み
る欠伸をした。さてこうなって見ると、もうおとなしくし
し かた み
ていても仕方がない。どうせ主人の予定は打ち壊わしたの
うら い よう た おも
だから、ついでに裏へ行って用を足そうと思つてのそのそ
は だ しゅじん しふぼう いか か ま
は這い出した。すると主人は失望と怒りを搔き交ぜたような
こえ ざしき なか ば か やろう どな
声をして、座敷の中から「この馬鹿野郎」と怒鳴った。こ
しゅじん ひと のし かなら ば か やろう くせ
の主人は人を罵るときは必ず馬鹿野郎というのが癖であ
わるくち い し し かた
る。ほかに悪口の言いようを知らないのだから仕方がない
いま しんぼう ひと き し む やみ ば か やろう
が、今まで辛抱した人の気も知らないで、無暗に馬鹿野郎
よば しつけい おも へいせいわがはい かれ せ なか の
呼わりは失敬だと思う。それも平生吾輩が彼の背中へ乗る
とき すこ い かお まんば あま う
時に少しは好い顔でもするならこの漫罵も甘んじて受ける
べんり こと なにひと こころよ こと
が、こっちの便利になる事は何一つ快くしてくれた事も
しないのに、小便に立ったのを馬鹿野郎とは酷い。元来人間
じこ りきりょう まん ぞうちょう
というものは自己の力量に慢じてみんな増長している。
すこ にんげん つよ で き いじ
少し人間より強いものが出て来て虐めてやらなくてはこの
さき ぞうちょう わか
先どこまで増長するか分らない。

わがまま がまん わがはい にんげん ふとく
我儘もこのくらいなら我慢するが吾輩は人間の不徳につ
すうばいかなな ほうどう みみ こと
いてこれよりも数倍悲しむべき報道を耳にした事がある。
わがはい うち うら と つぼ ちやえん ひろ
吾輩の家の裏に十坪ばかりの茶園がある。広くはないが
さっぱりとした心持ちよく日の当たる所だ。うちの子供が
あまり騒いで樂々昼寝の出来ない時や、あまり退屈で腹加
げん おり わがはい で こうぜん
減のよくない折などは、吾輩はいつもここへ出て浩然の
き やがな れい こ はる おだや ひ に じご
気を養うのが例である。ある小春の穏かな日の二時頃で

(接上頁) 反正主人的計劃泡了湯，我索性到屋後尿尿去了。屋裡傳來主人的咒罵：「這個笨蛋」，聲音中交雜著失望和氣憤。主人罵人的口頭禪就是「笨蛋」。主人不知道其他的罵人話，我也沒轍，可是也不體諒人家已經忍到現在，一味罵人笨蛋，實在不禮貌。如果平時我趴在他背上時，他對我和顏悅色一些，我也甘願受這樣的辱罵。可是他從來沒有爽快地給我提供任何方便，人家去小個便就大罵笨蛋，太過分了。人這種東西自恃有力而傲慢，如果沒有強者給他們點顏色瞧瞧，尾巴還不得翹到天上。

如果人類的自私任性僅限於此倒也能忍受，我曾聽聞一則消息，人類的無良無德，比這勝過數倍。

我家後面有一塊十坪⁶左右的茶園，雖不寬敞，但整飭得頗為整潔，是曬太陽的好去處。家裡的小傢伙吵得我睡不成午覺，十分無聊、腹中空空時，我總來這裡養吾浩然之氣。一個小陽春的平靜日子，下午兩點左右，吃罷午飯小睡了片刻，

6 日本的度量單位，一坪約為 3.3 平方米。

わがはい ひるめし ご こころ いっすい のち うんどう
 あつたが、吾輩は昼飯後 快 よく一睡した後、運動かたがた
 この茶園へと歩を運ばした。茶の木の根を一本一本嗅ぎな
 がら、西側の杉垣のそばまでくると、枯菊を押し倒してそ
 の上に大きな猫が前後不覚に寝ている。彼は吾輩の近づく
 のも一向心付かざるごとく、また心付くも無頓着なるご
 とく、大きな鼾をして長々と体を横えて眠っている。人
 の室内に忍び入りたるもののがかくまで平気に睡られるもの
 かと、吾輩は窓かにその大胆なる度胸に驚かざるを得な
 かった。彼は純粹の黒猫である。わずかに午を過ぎたる太
 よう とうめい こうせん かれ ひ 金 うえ な
 陽は、透明なる光線を彼の皮膚の上に抛げかけて、きらき
 らする柔毛の間より眼に見えぬ炎でも燃え出するようによ
 おも かれ ねこじゅう だいおう い い だい たい
 思われた。彼は猫中の大王とも云うべきほどの偉大なる体
 かく ゆう わがはい ぱい わがはい たんじょう
 格を有している。吾輩の倍はたしかにある。吾輩は嘆賞の
 わん こう き こころ ぜん ご わす かれ まえ ちよりつ し わねん
 念と、好奇の心に前後を忘れて彼の前に佇立して余念もな
 なが しす こはる かば すぎかき うえ で
 く眺めていると、静かなる小春の風が、杉垣の上から出た
 ごとう えだ かる さそ に さんまい は かれぎく しげ
 る梧桐の枝を軽く誘ってばらばらと二三枚の葉が枯菊の茂
 お だいおう まんまる め ひら いま
 みに落ちた。大王はかっとその真丸の眼を開いた。今でも
 きおく め にんげん ちんちょう こ はく
 記憶している。その眼は人間の珍重する琥珀というものよ
 はる うつく かがや かれ み うご そう
 りも遙かに美しく輝いていた。彼は身動きもしない。双
 ぼう おく い ひかり わがはい わいしょう ひたい
 眼の奥から射るごとき光を吾輩の矮小なる額の上にあつ
 めて、御めえは一体何だと云った。大王にしては少々言
 ば いや おも なに こえ そこ いぬ ひ
 葉が卑しいと思ったが何しろその声の底に犬をも拉しぐべき
 ちから こも わがはい すく おそ いだ
 力が籠っているので吾輩は少なからず恐れを抱いた。しかし挨拶をしないと陥呑だと思ったから「吾輩は猫である。

我到茶園走走，順便活動身體。我逐枝嗅著茶樹的根部，走到西邊杉樹院牆邊，忽見一隻大貓臥倒在幾支枯菊上呼呼大睡。我一步步走近，而他渾然不覺，或是根本不以為意，鼾聲大作，舒展身體兀自酣眠。跑進別人家的院子，還能如此若無其事地安睡，這膽量讓我暗自驚訝。他是一隻純種的黑貓。剛過正午的陽光將透明的光線灑在他的皮膚上，柔軟的毛髮閃爍著光芒，彷彿看不見的火焰在燃燒。他體格健壯，足有我的兩倍大，在貓類裡稱得上大王。我既讚歎又好奇，忘了進退，佇立在他面前仔細打量。小陽春柔風習習，拂動高出杉樹的梧桐枝葉，將兩三片樹葉吹落枯菊叢中。大王倏然睜圓了眼睛。我至今仍記憶猶新，那雙眼睛比人類視為寶物的琥珀更加美麗璀璨。他的身體歸然不動，雙眸深處射出的光芒直盯著我低平的前額，「你小子是啥玩意兒？」身為大王，措辭略顯粗鄙，而那聲音低沉有力，連犬類也會被其銳氣所挫。我頗為畏懼，不回應則後果堪虞。於是強裝鎮定，冷冷地說道：「在下是貓，名字還沒有。」